

事実による証明を！ 唯物論的理解の必要性

ストルーヴェ氏は一般的に論じ、現物経済から商品経済への移行を素描し、この世では事態は大部分まさにこうこうであったと指摘し、しかも、そのさい個々のあわただしい指摘をただけでロシアにうつり、「経済生活の歴史的発展」の一般的過程をロシアにもおしひろげている。このようにおしひろげることがまったく正当なものであること、また著者の「歴史的考察」が、ひとりロシアの歴史ばかりでなく歴史一般をまちがって表示しているナロードニキ主義の批判のためにはまったく必要であることは、論議の余地がない。しかし、これらの命題をより具体的に述べ、一般的過程をロシアにおしひろげることの正しさを否定しているナロードニキの論拠に、これらの命題をより明確に対置させるべきであったであろう。つまり、ナロードニキによるロシアの現実のこのような理解を、マルクス主義者による**同じ現実の別の理解**と対比させるべきであったであろう。他方では、著者の議論の抽象的性格はそれらの命題の説明不足をもたらし、彼がそのような過程の存在を正しく指摘しながらも、そのさい、どのような諸階級が形成されたか、どのような諸階級が、自己に従属する他の住民層を保護しつつこの過程の担い手となったかを究明しないという結果をもたらしている。一言でいえば、著者の客観主義はここでは唯物論にまで——これらの術語の、うえに述べた意義における——たっしていないのである。

注) 客観主義と唯物論とのこのような相互関係は、とりわけ、マルクスがその著『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』の序文のなかで指摘している。マルクスはこの歴史的事件についてプルードンが本（『クーデター』）を書いたことをかたり、そして彼の見地を自分の見地と対立させて、つぎのように批評している「プルードンのほうは、そのクーデター〔十二月二日の〕を、それにさきだつ歴史的発展の結果として説明しようとする。ところが、プルードンにとっては、クーデターの歴史的構造が、いつのまにかクーデターの英雄の歴史的弁護にかわってしまう。こうしてプルードンは、われわれのいわゆる**客観的**歴史記述家のおかず誤りに陥っている。これに反して私は、ある平凡な奇怪な人物に英雄の役割をつとめうるようにさせる環境や事情を、どんなにしてフランスの階級闘争がつくりだしたか、ということを証明するのである。」（序文）〔選集、第五卷、四二二ページ〕
第一巻 ナロードニキ主義の経済学的内容 P457-459

マルクス主義者にとってなすべきこと

マルクス主義者にとってぜひなすべきことは、全問題を、なにが存在するか、それはなぜそのようであって、べつのようなものではないのか、ということの解明に帰着させることではなかろうか？
第一巻 ナロードニキ主義の経済学的内容 P457-459

コメント

全問題を、現実を、唯物論的に理解し、階級対立を明らかにし、歴史的必然性を証明し、それを労働者に分かり易く説明（宣伝・煽動）することが必要である。